

ギャップを超えて伝える

鷹取裕成

はじめに

「ユダヤ人にはユダヤ人ようになりました。それはユダヤ人を獲得するためです。……律法を持たない人々に対しては、——私は神の律法の外にある者ではなく、キリストの律法を守る者ですが——律法を持たない者になりました。それは律法を持たない人々を獲得するためです。」

(コリント 9：20-21)

聖書の真理を伝えるということは難しいものである。私自身、クリスチャンになって45年、牧師になって30年あまり経つが、いまだに、このように話せばよいというものを見出していない。メッセージをすることに、こう話せばよいだろうか、ああ話せばよいだろうか、模索しながら四苦八苦している。神学校で説教を学び、説教演習を受け、聖書から語るということが何であるかを、実によく教えていただいた。それが私のメッセージの基礎になっている。ただ、そこで想定されていた「メッセージの場」は、できあがった教会、つまり、主を愛し、日曜日には当然のように礼拝に集い、聖書からメッセージを聞きたいと思っているクリスチャンが大部分であるような教会であったと思う。しかし、私自身は、以前に牧師をしていた教会も開拓的な教会であったし、現在牧師をしている2つの教会も十数年前から兄弟姉妹とともに開拓して来た教会で、ずっと開拓伝道的な環境の中にいる。そんな中で日本人に聖書の真理を

伝える難しさを感じ、あれやこれや自分なりに工夫して来た。ここに述べることは、そのような自分の経験に基づくことで、神学会誌に載せるにはおこがましいように思うが、伝道の現場におられる方に少しでも参考にしていただければ幸いである。

I. ギャップ

1. ギャップが存在する

聖書の真理を一般の日本人に話す上で、大きな障害あるいはギャップを感じる。それは、信じる者と信じない者との間のギャップという意味ではない。もちろん、一般の日本人はたいがい未信者なので、そのギャップもあるが、それは日本人に限らず、人類に普遍的なギャップであり、聖霊の奇蹟がなければけって埋まらないギャップである。ここで言うギャップは、信じるか信じないか以前に、話していること自体が伝わらないコミュニケーション上の障害である。何を話しているのかさっぱりわからないとか、別世界の話のようで、自分とどう関係するのかわからない、といったことである。

2. 用語によるギャップ

ギャップの原因のひとつは用語の問題である。牧師は神学用語や教会用語になじんでいるために無意識のうちにそのような用語を使ってしまうことがある。たとえば、「特別恩寵」、「位格」、「戒規」、「陪餐」といった用語である。それは一般の人にとっては外国語であって、到底理解できるものではない。私たちは神学用語や教会用語を使わないように注意する必要がある。しかし、たとえそういう用語を使わず、やさしい言葉で話したとしても、日本の一般社会では、神や信仰についての言葉は日常ではほとんど聞くことがないので、なじみのない言葉、なじみのない表現となってしまう。たとえば、「生まれながらの罪」という言葉はけって難しい言葉ではないが、「業務上過失致死罪」という専門用語のほうがニュースで聞きなれているので、ずっとわかりやすいのである。

3. 関心の違いによるギャップ

ギャップの原因のひとつは関心の違いである。言葉は真空中で語られるものではなく、ある状況、ある関心の中で語られるものなので、関心のある人には大いに意味があっても、関心のない人にはほとんど意味がないことが多い。イエス・キリストの福音も、旧約の、創造主なる神、律法、終わりの日のさばきなどを前提にして、いかにしてそのさばきを免れるかということに関心のある人々に対して、「良き知らせ」として語られたものである。パウロもパリサイ人として厳格な生活をしながらも、神に義と認められないのではないかという不安を持っていた。そんなパウロにとって、信仰によって義と認められるという福音は文字通り「良き知らせ」であった。ルターも当時の教会の律法的な教えによって、神のさばきを恐れていて、善行に励んでもその恐怖は募るばかりであった。そんなルターにとって福音こそが求めていた救いであった。ウェスレーはモラヴィア兄弟団との出会いをきっかけに回心するが、それよりずっと以前、オックスフォード大学で仲間とホーリークラブを始めたほど、きよい生活に関心があった。一般の日本人にそのような関心がどれほどあるだろうか。皆無といってよいほどではないだろうか。そんな日本人に福音を伝えても、ほとんど意味のないものになってしまうのである。

4. 宗教的背景とくに神概念の違いによるギャップ

一般の日本人は神道や仏教という多神教の宗教的背景を持っている。聖書の唯一神教と多神教との違いは、単に唯一か多数かという数の違いではない。この世界の中に住んでいる神か、超越した神かの違いであり、神中心の宗教か、人間中心の宗教かの違いであり、永遠普遍の真理や正義があるか、そうでないかの違いであり、神は何もかもお見通しであるか、そうでないかの違いである。これだけ違えば、人々の考え方も宗教に対する姿勢もまったく違って来る。たとえば、多くの日本人は、ひとりて幾つもの宗教を持っている。神社仏閣があれば、宗派にかかわらず、お参りして手を合わせる。行事のときには伝統的しきたりを守ってお参りするが、普段は無関心である。若い世代は、あまり神社やお寺にお参りしないので、宗教とは無縁であるかのように見えるが、オカル

トや占いは盛んだし、初参りは増加の一途をたどっていて、けっして無縁ではない。自分では無宗教だと思っても、クリスチャンである私たちから見ると、事あるごとに多神教的な考え方が出て来るのである。そのような多神教の宗教的背景を持つ一般の日本人にとって、キリスト教は別世界の話であって、容易に受け入れられるものではない。

中には、キリストを簡単に受け入れる人がいる。救われたと言って喜び、集會に集い、クリスチャンの交わりにも楽しそうに参加している。しかし、何かが違う。よく聞いてみると、日本にはいろいろな宗教、神々があるけれど、日本の神々はあまり好きではなかったところ、キリスト教の集會で感動したので、キリストにしようと思ったというのである。そういうことも求道の一段階としてはありうるのだが、その時点では、キリストを唯一の神のひとり子として信じているのではなくて、多神教の神々のひとつとして信じているのである。

5. 教会のゲッター化

以上のようなコミュニケーション上の障害があるにしても、かまわず、神の言葉をそのまま、聴衆が理解しようとすまいと、黙々と語って行くという行き方がある。それに対しては、エゼキエル書2章7節の「彼らは反逆の家だから、彼らが聞いても、聞かなくても、あなたはわたしのことばを彼らに語れ」という言葉が根拠になるかもしれない。しかし、エゼキエルの場合は、コミュニケーションの問題ではなく、その点では何の問題もないにもかかわらず、確信犯的に神に反逆している人々にさばきを宣言しているのである。迷っている人々に救いの道をどう伝えるかという問題とは異なる。もし、用語、関心、宗教的背景などの違いを無視して語った場合、理解できない人は教会から去ってしまうだろうし、忠実なクリスチャンだけが教会に残ることになる。そして、クリスチャンは聖書的あるいは教会的な言葉に慣れ、そういう言葉を話すようになり、教会は、人々が特殊な言葉をしゃべり、自分たちだけで理解し合っているという特殊な場所になる。また、そういうクリスチャンが世の中で福音を証しようとしても、一般の人に通じる言葉では話せない。それは、教会が遊離してしまうことであるし、ゲッター化することではないだろうか。

II. 方策

1. 未信者を対象にして話す

メッセージをお願いするときに、よく、伝道メッセージですか、クリスチャン向けメッセージですか、と聞かれることがある。伝道メッセージは未信者にキリストの救いのすばらしさを紹介するメッセージなのだろうが、クリスチャン向けメッセージとは何なのであろうか。クリスチャンに信仰生活の仕方を教えるメッセージなのだろうか、聖書の講解メッセージなのだろうか。しかし、もしクリスチャンが聞く価値のある話なら、未信者にも聞かせるべきではないだろうか。未信者が聞いてもわからない話であったり、聞かせないほうがよい話であれば、クリスチャンにとっても聞くほどの話ではないだろう。逆に、伝道メッセージがキリストの救いのすばらしさを伝えるメッセージなら、同じ話の繰り返しでない限り、クリスチャンも聞くべきだし、聞きたいものではないだろうか。これが、子供向けメッセージと大人向けメッセージの区別ということなら納得できる。子供と大人とでは語彙にも内容にも超えられない大きな差があるからである。しかし、伝道メッセージとクリスチャン向けメッセージを区別することにはあまり根拠がないように思う。

仮にクリスチャン向けメッセージというものがあつたとして、それをクリスチャンたちが集まる集會で話した場合、どんな集會にも未信者が参加しているものだが、その未信者は理解できず、疎外感を持つことになり、躓きを与えることになる。そういうわけで、私はどんなときにも未信者を対象に話すようにしている。未信者といっても、教会で話す限り、キリストに反対の人はまず来ないので、ほとんど求道者であるが、そういう人を対象に話すようにしている。そうすれば、当然クリスチャンは理解できるし、みんなが理解できることになる。ただ、未信者を対象に話すためには、言葉や概念をかなり噛み砕く必要がある。

2. 受け入れられることだけを話す

聖書から話すときには、聖書の真理に目を開かせ、間違いに気づかせ、この